

R・H・ブラントンと洋式灯台の建設

日本の灯台の父、リチャード・ヘンリー・ブラントン



リチャード・ヘンリー・ブラントン
[Richard Henry Brunton] 1841-1901
スコットランド、アバディーン生まれ

ブラントンは、明治元年(1868年)8月、26歳で妻子、二人の助手と共に来日し、日本に滞在した明治9年(1876年)までの8年間に、国内に約28基の灯台を建設し、日本の灯台システムを確立しました。

ブラントンをリーダーにイギリス灯台技術団の高度な技術と厳格な職場規律は、その後の日本の灯台技術の礎として受け継がれました。ブラントンはその功績から「日本の灯台の父」と呼ばれています。

明治9年(1876年)イギリスに帰国した後、論文「Japan Lights(日本の灯台)」を学



建設中の御前崎灯台、真ん中の白い服の男性がブラントンと思われる

会で発表し、以降も建築家として設計・建築の仕事に携わりました。

仕事の合間に書きためていた「ある国家の目覚め・日本の国際社会加入についての叙述とその国民性についての個人的体験記」という体験記の投稿を終えて明治34年(1901年)永眠しました。

ブラントンのエピソード

●ブラントンは、灯台官舎が完成するまで、御前崎村の大庄屋・松林久左衛門宅の奥座敷を宿舎としていた。胸のいっさいは、日本政府から差し向けられたコックが食事や身の回りの世話をしていた。



●狩猟が好きなブラントンは、2匹の犬を連れて付近の森に行き、度々、小鳥などを仕留めて来たりした。



●御前崎の村人は、奥さんと腕を組んで楽しそうに散歩する二人の姿をあっけにとられて見ていた。

●ブラントンは、気さくに「おはよう」、「こんにちは」、「おかみさん」などと村人に声をかけた。時には、娘をつかまえて、「おかみさん、こんにちは」などと愛嬌をふるまった。



はじめは異国人を怖がっていた村の者も次第に親しみを感じるようになってきた。しかし、彼らの生活様式は村人にとっては理解できないことが多く、物好きな者は、石けんを使って体を洗っているブラントンの入浴姿を覗き見て、西洋人の肌の色が白いのは体を砥石で磨いているからだ、と村中に触れ回った。

また、ワインを飲んでいるのを見て、西洋人が赤ら顔で体格が良いのは血を飲んでいるからだ、と決めつけたりもした。

昭和9年、灯台60周年記念祭を伝える静岡新聞より

江戸時代幕末になると西洋諸国の船の来航も多くなり、特にイギリス船や鳥取藩の軍艦が御前崎沖の暗礁に乗り上げるという事故が起こり、これが中央政府に知れて問題化し、洋式灯台の建設が早まった。

明治5年5月、佐田岬、伊王島等の建設を終わった築造方首領リチャード・ヘンリー・ブラントンが、設計書を握ってさっそうと御前崎にやってきた。近郷近在から、大工、石工、左官等が続々と入り込んで寄宿舎や飯場を建て、居酒屋まで出現するというありさまで、岬はインフレ景気に沸いた。陸の孤島の小さな漁村に突如、人が集まり、異国人とともに西洋文化が躍り込んで来たのだから村は騒然とした。

灯台の光を恐れて魚が沖に逃げていってしまうと工事に猛烈に反対した漁師。ちっぽけな土の塊で50尺(約15m)も60尺(18m)もの塔ができてこない、とあざ笑った大工等々。村人たちの驚きと物珍しさの中で、レンガ造りの灯台はまるで生き物のように高く伸びて行き明治5年5月26日着工から2年の歳月をかけ、明治7年4月30日に完成した。



そして、その夜、落成式が行われ、ブラントンら関係者が祭壇の設けられた外郭から餅投げをして祝った。

歴史的瞬間は、灯台構内や海岸に集まった村人や近郷近在の人達が見守る中、ブラントンがスイッチを入れると、レンズが回転し、サツと真っ白い光の矢が灯台の頂上から飛んだかと思うと、スーッと尾を引いて遠州灘の沖合い遙かに帯のように流れ、村人達は「ワーッ」と歓声を上げてこの光の軌跡を祝福した。